ひかりのこ

光の子

No.104　2003. 7. 1

●今年の聖句　わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。（ヨハネによる福音書１５：１２）

「ないしょ」　　挿絵・中島英子

「朴ひらく」

さみしくて少年はしる麦の秋
ランドセル茅花（つばな）ながしの土手にかな
朴ひらく孤りっきりの好きな子に
やり場なき怒りへ向けて打つ草矢
ラムネ飲むみんな眩しい眼（まなこ）して
鉄砲の匂ってるたる夕焼かな
母恋のほたる父恋の雲の峰

黛　執（『春野』主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子 編集委員会　e-mail:khikari@ceres.con.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／さくらプリント

第八回感謝の集い　感謝礼拝説教（一九九二年十一月三日）

「悔い改めて福音を信ぜよ」

福島　勲　前理事長

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて言われた、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」（マルコによる福音書一：一四～一五）

キリストイエスが福音を述べ伝えての第一声、最初の言葉が「悔い改めて福音を信じなさい」ということでした。キリスト教と申しますのはこの言葉に尽きると言ってもいいんです。皆さん罪を悔い改めて神様を信じなさいということなんです。キリスト教会の働きもこれであります。しかし、日曜日に集まってくる度に皆さん「罪がありますぞ。罪を悔い改めなさい」なんて言われますと、だんだん何か本当らしいのだけれど教会に行くのが嫌になる。「また行ったら罪だ」となり、牧師さんも考えまして、いろいろなことを勉強されて楽しくあるいは、時代の流れの話をしますけれど、本来の所は皆さんに罪を憶えさせて神様の前に悔い改めることが本流であります。

歴史をみますとキリスト教は教育事業やこのような福祉施設などをしてきました。病院を建てて病院経営もやりました。あらゆる角度でいろいろな事をいたしますけれどこれはみな支流です。これは悔い改めて福音を信じていただける所へ導く支流なんです。その本流に導き入れる流れだと私は思います。長らく教会は色々なことをしてきましたが、そういう事を皆さんはご批評なさっています。それは本来のものではないんですから私たち自身は色々いたらぬところがあってもこれはやむを得ないものなのです。

もし日本にもたくさんありますこのキリスト教会が「皆さん罪がありますぞ。悔い改めて福音を信じなさい」ということを忘れて、あるいは括弧の中にいれ、あるいはどこかに閉じこめてしまっているのならばこれは教会というものは死んでいるのだと私は思います。私も教会で四十年近くこれを話してきました。歌舞伎なんかでしたらみんな話が解っているんですが喜んで観てますね。「あそこで目を剥くぞ」など、みんな外題を解っていて歌舞伎なんかを観ますけれど教会と言う所はひとつの外題しかありません。それを毎日同じことをやっとりますと飽いてきますから色々なことをなさるというわけです。それで「みなさんひとつ悔い改めていただきたい」と言うと「俺は悔い改めることなぞないぞ」とおっしゃるかもしれませんが、人間というものはなかなか「はい私が悪うございました」なんてことは言いませんよね。

ご主人は男の沽券にかかわるとか言って間違っていても「すまんと」は言わないでしょう。まあせいぜい人様から色々な事を言われましたら「襟を正して受けとめます」とか「厳粛に受けとめます」とかそういう便利な言葉を使いますけれどいったい何ですか「厳粛に受けとめます」って、それから「私の最も悲しみとする所であります」とおっしゃるけれど、悲しみとしてどうするのですか。決して「すみません」とは言いません。これは男ばかりではありません。奥さん達だって同じです。ご主人から言われたことに「なに言ってんの」と心の中では思っているのに「これを言うとあの人の気に障ってどうにかなる」と思うものですから奥さん達は言葉を謹んでいる。でもちょっとふて腐れますと

「電信柱の高いのもポストの赤いのもみんな私が悪うございました」なんて悪態をつく。

ただ「すまん俺が悪かった。」「すみません」と言えばいいんだけれど言えません。これを言う勇気が必要です。これを言う真実さがなかなか無いものですから個人の関係も非常に悪くなりますし、国と国との関わりも誠に妙な関係になってしまいます。ひと言「悪い」と言えばいいんです。言わない。人間は自分も含めてそういうものだと思います。

歴史を見てみますと「自分が悪かった」と思ってっ悔い改めようとする人は無いではないです。

私は中学時代に和歌山県の新宮市で過ごしたんですが、その頃、ある本を読んでおりましたら、熊野三社といって、本宮、新宮、那智山この三つの所に神社がありまして八世紀少し前から

紀州参りが盛んに行われました。そして京都や奈良の周辺から偉い人たちがしばしば参詣にいったわけです。後白河法皇が一番多いんですがあの偉い方が三十数回も紀州まで車でいくわけではありませんし大変な業だと思う。これはこの人達が自分の幸いを願って紀州まで行ったんだと思いますが、一般庶民は自分の罪滅ぼしの感覚でもって紀州詣をしたらしいですね。紀州にいらした方もおいでだと思いますが、山がずうっと海に迫りまして本当に行きにくい所だと思うんです。熊野という呼び方をしていますが「熊」ということは「隅っこ」ということでしょ。「隅っこの野原」なんです。奈良、京都から見ると本当に「隅っこ」なんです。そこに行くのに大変な苦行をしながら行った。そして苦行、難行をしてそれが罪滅ぼし、罪についての問題の解決を得ようとした人たちがいる。後白河法皇がどれだけご自分を罪の問題を責めなさったかは存じませんけれども、ある人たちはそこで、お坊さんになってさらに浄土を目指したと書いてあります。それは、そこに普陀落渡海（ふだらくとかい）というのがあり普陀落とは梵語で浄土といい、浄土に渡っていく信仰がある。これは悲惨な信仰ですよ。つまり小さな船に乗せられほんのわずかな食料を入れられて船は釘付けにされて大屋船に曳航されて行きある所で切り離す。今でもその切り離した所で綱切島という島があります。そこまで来ると曳航した船が綱を切って流してしまう。中に入っている人は生きたまま いつかは死ぬわけで、自殺のようなもの。そこでもって海の彼方にある浄土にいこうという悲壮なあり方で、それが八〇〇年頃から一七〇〇年頃までの間に記録に残っているだけでも四二回、四二人の方がそのような死に方をしている。私はそれを読みましてこれは本当にすごい事だと思う。私はそんな所に住んでいたのかと思いました。紀州の人はどれだけ悔い改めたかはよくわかりませんが、そういう記録があるわけですから我々の先祖の人たちも実際自分の罪を悔いてそういう決意までして普陀落渡海を試みた人たちがいるということです。でもここでひとつ考えていただきたいことは自分の罪を「俺は悪いことをした」と悩み苦しむと結局最後には死ななければならなくなる。自分の罪の精算をするためにはそういう悲惨なことになるということです。

聖書の中にもイエスに十二人の弟子がおりましたけれどその一人の弟子ユダが「俺は悪かった」といって首をくくって死んだと書いてあります。下手に悔い改めるとそういう結果を招いてしまうのです。

やはり「悔い改めよ」とキリストは言われ、その後「福音を信ぜよ」とおっしゃったんですね。福音とは、よきおとづれということです。そのよいおとづれとはイエス・キリストが十字架に架かって「自分を信じる者のすべての罪を赦す」と言われて赦される。これが神様の恵です。これが福音です。そして「この福音を信じなさい」とおっしゃった。

ただ単に自分が悪かったと思う程度でしたらある意味においては悲惨な結果を招きます。そして反省をするだけならこれはお猿でもするらしい。反省するだけではだめすよ。反省と悔い改めとは違います。心を本当に変えなければならない。心を変えることは自分で反省してもなかなか変わりません。そんなに簡単なものじゃないいんです。私たちの性格を考えても解るでしょう。なかなか意識したって変わりません。

悪いことをしたという悔い改めの後にイエスを信じる信仰がなかったら今申し上げたように普陀落浄土を求めて死んでしまうような結果になる。みんな悲惨な状態になります。

悔い改めるということは新しい命を獲得するジャンプ台ですね。そこに私たちが気がついてイエスを信じるところへ立ち返るのです。私たちが悔い改め、新しく生まれ変わるのです。人生の生まれ変わりは本当にそこにあると思うんです。

何事におきましても新しい出発点に立たなければなりません。聖書の中には神様が人間の一番はじめにアダムとエバを創ったと書いてあります。アダムとエバが裸でちっとも恥じることのなかったというのはですね、神様の前にたってもちっとも恥じることのなかった人間だった。それが堕落したんだ。その堕落をもういっぺん神様の前に立てるよう人間になる信仰を持つことがキリストの教えなんです。私はここで教会でいっている様なことを始めていらした方にも話しておりますけれど、ここで人生においての再出発をしなければならないという事柄とそして本流ということを申しました。私はこの施設には本流があると思いますから、この施設の本流を守っていかなければならない。あまり野心を抱いてみたり他のことをするのではなくやっぱり与えられた使命をみんなが心をあわせて本流である業をつづけていきたいと思うからこそこういう事を申し上げているわけです。

福音を信じる。「悔い改めて福音を信ぜよ」キリストがおっしゃたことをもう一度自分の言葉として考えていただいて、どこにもう一回自分は立つか、とくとお考えいただきたいと願います。

追悼
福島　勲 先生

竹花　信恵

前理事長福島勲先生の遺影には、バラの花が写っています。自然をこよなく愛された先生でしたが、おそらく、このバラの花の季節を最も愛されたのではないでしょうか。信州のお宅に伺った時の一面のバラの花々が目に浮かびます。丹精こめて育てていらっしゃいました。

菜園には、いろいろな野菜が収穫の時期を待っていました。何でも知っていらっしゃる先生も、「農業」についてだけは初心者であり、御近所の方に聞いたり、時には本と首っ引きだったりその試行錯誤のお話を何回かきかせていただきました。どちらかというと失敗談のほうが多かったのですが、それはとても楽しく、ユーモラスでした。どんなことからも、どんな人からも学ぶ姿勢はいつも一貫している先生です。

毎朝、目覚めると、まず蓼科山を眺める、とおっしゃていた先生のあの日の病室からもくっきりと山々が眺められました。「また伺います」と握手をした時から一週間もしないうちに天国に召されたことを知らされました。

信州の山中から大利根町の私たちの所まで距離は近くはありません。ましてご高齢での車の運転はどれほどお疲れになったことでしょう。

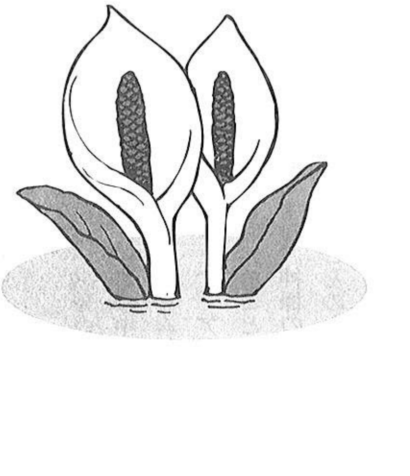
創立当初はもちろん、どうしたらいいかわからなかった時、先生はかけつけてくださいました。そして矢面に立って守ってくださいました。そのおかげで今があることを改めて思います。今になって、感謝の気持ちさえ充分伝えられなかったことに気づきます。

何か文章を書こうとすると先生の一文が頭をよぎります。「やたらと形容詞や副詞や感嘆詞を駆使した文章で巧みに表現して自賛するのを戒めよう」と言われます。その通り飾ることをきらい、静かに、さりげなく真偽を見分けられる方でした。だからこそ、どんなに心配していただいたかわかりません。

先生の生き方を通して最も強く伝えられたメッセージは、謙虚であることの大切さです。いつのまにか思い上がり自分の意見に固執し、人の話が聞けなくなっている私自身に悲しい顔を向けられることでしょう。そしてハッと私に気づかせて下さるでしょう。

思いがけず、最後のお見舞いになってしまいましたがその日、「先生、畑やお花がご心配でしょう」とお聞きしました。先生はニコニコなさり、「だいじょうぶなようにしてあるよ」とおっしゃいました。何から何まで誰に対しても、一輪の花にさえ迷惑をかけないようにすべてを整え準備なさっていたことは私にとって大きな驚きです。私たちは、そんな先生の祈りによって強く支えられていたことを忘れずに歩んでいきたいと思います。

何を大切にし何を拒否し何を守っていくか、これからもきっと失敗だらけになりそうですが、教えていただいたことすべてに感謝し、そんな思いを子どもたち、次の世代に伝えていけたらと願っています。



学者もどきのつぶやき ㊶

菅原哲男著「誰がこの子を受けとめるか」出版記念会

山形大学　学長　仙道富士郎

昨日の土曜は、山形県内の神経科学をやっている人達の集まりで挨拶を頼まれ、夜の宴会にも出席、今日、日曜は光の子どもの家施設長菅原哲男氏の出版記念会出席のため大宮行きの新幹線に乗り込む。少し疲れているので、グリーン車に乗り換えようとするも、なぜかグリーン車だけ満員。老人性症候の一つとしてトイレが近いので、いつも通路側に座席をとる。

米沢から窓側の席に御婦人が乗りこんでくる。いかにも高価そうな旅行カバンを荷物棚にのせるのを手伝う。すると、件の御婦人、「すみませんが、トイレが近いので、窓側の席と替わってくれませんか。通路側の席を予約してくれと言ってあったのに…」、「僕もトイレが近いので…」とつぶやきながらも、仕方なく席を替わる。

席を替わったものの、無性に腹が立つ。頭のはげ具合を見れば、小生だって老人であることぐらい分かるはずなのに。これぐらいの年格好の女には、こういう図々しい手合が多い…。セクハラ発言といわれようと、事実だから仕方がない…。と、持ってきた仕事に集中しているうちに大宮に到着。「すみませんでしたね」、御婦人の一言で救われた気持ち。「いや、いや」、本当は怒っていたくせに。

会場には中学時代の同級生が既に集まっていた。小生を入れて都合6人。腰が痛い、膝が痛い、誰それは癌で死んでしまった、老人の会話にひととき花が咲く。

菅原氏の交友関係の広さゆえか、会場には多くの人達がお祝いに駆けつけていた。後で伺うと、130人という。型のごとく来賓の挨拶、乾杯と進み、開宴となり、そのうちテーブルスピーチが始まる。着席ビュッフェスタイルの宴席だったこともあり、話す人は喧噪の中で声を張りあげなければならず、気の毒だなぁと一瞬思った。

先輩の硬骨漢の教授は、宴会でのテーブルスピーチを拒否してきた。「誰も聞いていないところで話す気などせん」と。

ところがである。スピーチが始まると、皆、隣席の人との会話を止め、スピーチに聞き入るのである。仕事柄多くのパーティーに出席してきたが、これは私にとって初めての経験である。ここに集まっている人達は何か違うと思った。

その想いは、「ロマンス」のギター演奏が始まったとき、いよいよ確実なものとなった。パーティーでのギター演奏の試みにも何回か出会ったことがあるが、すべての場合に演奏はほとんど、いや全く聞こえず、演奏者はいつも悲しい顔でステージから去るのが常であった。しかし、今回は「ロマンス」の繊細なメロディは、私達の耳に届いた。司会者の計算違いからか、時間が足りなくなってしまったらしく、予定されていた他の曲目の演奏は割愛されてしまったが、もっと聞きたかったと思わせるほどに、ギターの音色は会場を満たしていた。これはパーティの奇蹟というしかない。

多言は弄すまい。光の子どもの家を介して菅原氏の周囲に集まった人達が、なんとも上質であり、また、菅原氏を中心とする子どもの家の職員のまさに言葉通りの献身的な生業を、この人達はまんじりともせずに見守ってきたということだ。

二次会へ繰り出す道すがら、今度の本の出版元である言叢社の編集者の方と話した。話は週間朝日に掲載された、芹沢俊介によるこの本の書評のことになった。「人間の生はイノセンスとしてある」と鋭く児童の養育問題に切り込む芹沢氏の文章にしては、文脈の運び方が甘いのではないかと、書評を一読して思った。そのことを彼女に告げると黙って笑っていたが、「よし、この本を売ってやろう」という菅原氏への想いが、芹沢氏の筆を鈍らせてしまったのではと思うのは勘繰りか。

それにしても、この本は売れてもらわないと困るのである。というのも、パーティの終了の挨拶を依頼された私は、いつもの通り、菅原氏へのエールの音頭を取ったのだが、その枕に「この本が売れて、その印税で菅原氏のおごりでまた飲めることと、光の子どもの家がますます発展することを祈って」と言ってしまったからである。

「光の子」の読者の皆様、どうかこの本を買って読んでみて下さい。なかなかすばらしい本ですよ、本当に。

2つの文化に生きる
38

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京子

今年も年に一度の宣教師大会に参加した。今年は何と娘も一緒に参加した。何年ぶりだろうか。子ども達が小さかった頃はよく一緒に行ったものだが、ここ何年かは夫婦だけの参加だった。

今年はなぜか娘が突然「わたしも宣教師大会に行ってお手伝いをしたい。」と言い出したのだ。子ども達が中学高校に入った頃から家族旅行となると無理やり連れて行くことの多かったこの頃だっただけにこの旅行は本当に貴重なものだった。子どもが成長して行くに連れて何かを一緒にしたり、どこかに一緒に行く度にひょっとしたらもうこういうことは二度と一緒にしないかもしれないと思ったりする。数年もすれば、それぞれが自立し独立して私たちの手の中から育って行くからだ。とにかく、最近、特に子ども達と過ごす時間がとても愛おしく高価な時間のように思える。

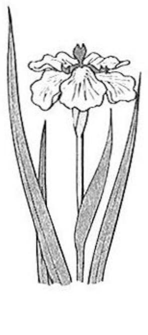
この大会は小さな子ども達が親と一緒に参加するので、娘は今回ベビーシッターのヘルパーとして奉仕し、三日間、子ども達にとても慕われて一緒に遊び、子どもを持つ宣教師たちから感謝されていた。

さて、今年の大会テーマは「平和」についてだった。アメリカのイラク攻撃が始まった真只中、いつもとは違うどこか重苦しい雰囲気の中での宣教師大会だった。平和についてのバイブルスタディー、実際に社会の中で働いているHELP、NCCからの報告、北海道で外国からの船乗りたちへの援助福祉の報告、それらに続く小グループでのディスカッション、又、夜は有志のタレントショウ等、今年も盛り沢山のプログラムだった。

その中で東神大の講師をしておられるジャンソン先生のバイブルスタディーはとても心に残り後々まで考えさせられるものだった。「平和」という言葉が今、世界中のあちこちで聞かれているのにもかかわらず、私たち人間には何が平和なのか分からなくなってきている。ジャンソン先生は平和と言う定義には三種類あると言われた。一つ目は従来ある協定などで成り立つ平和、暴力や戦いがなくなること。二つ目は「和」による平和。これはいわゆるハーモニーである。しかし、私たちキリスト者にとって一番大切なのは三つ目の「シャローム」と言う言葉であらわされる聖書的な平和である。これは私たちが神様と共に歩んでいること、そして私たちが神様の御心を理解していることである。本当の平和を築く人になるために、私たちは神様の御心が何であるかを理解するだけの信仰と祈りを身に付けて行かなければならないことを改めて感じた。

ところでこの大会で、ある有志が教団関係宣教師の集まりとして、ブッシュ大統領に反戦の声明を出そうと提案した。参加者全員の賛同のもとで、と提案したところ「待った」の声がかかった。戦争は反対で平和を望んでいるが、今回の戦争に対して頭から反対を言えないという若い宣教師が声を上げた。「一言では言えないが、今、自分の友だちが現地に行って戦っている。それを頭から反対と言えない。複雑な気持ちだ。」と発言した。他にも理由は言えないが、賛同できないという意見を持つ人がいることがわかった。結局、無記名投票で賛否を問い、宣教師大会参加者の70パーセントの人たちの賛同のもとで声明を出すこととなった。宣教師たちの間でさえ、平和への気持ちが一つになれない。何を平和と考えるのか、改めて考えさせられた。

イラク戦争においてアメリカは五〇万人という兵士を送り込んだと言われている。兵士のひとりひとりは本当の「平和実現」を信じて戦っていたのだろう。イラク側も同じだったに違いない。彼等も「平和実現」のために戦ったのだろう。果たして戦争が終わった今、その平和は訪れたのだろうか。又、もし訪れていないのならいったいいつ訪れるのだろうか。平和という言葉を軽々しく口に出せなくなっている今の世の中において、ほんとの意味でのシャロームが実現されるように祈るものでありたい。



ひかりのこ ……………………………………………………………… No.104

エッセイ

近頃のこと

彫刻家　中島　睦雄

☆玄関のあたり

玄関の上り口が四十一センチ程あるので、二十センチの石を置いて、二段で上ることになっていた。しかし、近頃はもっと楽に上れるようにという必要に迫られ、大工さんに頼んで三段にしてもらった。ついでに手すりも付けてもらったものだから、大分楽に上れるようになった。もっと早くこうしておけば良かったとも思った。

大工の棟梁である若いOさんと相談して工事をすすめるのだが、そのOさんについて感心させられた事があった。

手すりはここへこうしましょうとか、壁は少し明るく張りましょうなどと、いろいろと相談をしてOさんは帰るのだが、何度来ても必ず、スリッパをきちんと揃えて玄関の端に置いていくのである。普通は誰でも適当に脱いで帰るのわけだが、Oさんは必ず、決まってきちんと揃えて帰る。

こんな事は小さい事かも知れない。しかし、こういうタイプの人を、近頃余り見かけない。こういう事がすっかり身に付いていて、自然の動作となって無意識的にやれるという事は、やはり立派な事だろうと思う。

Oさんの所の職人がまたこんな感じであった。玄関から廊下の奥まで工事をしてもらったのだが、仕事が全部終わった時に、自分で持って来たバケツと雑巾で、きれいに雑巾がけをして帰ったのである。カンナくずや小さなゴミまで全部持ち帰ったのには驚いた。「これ、後で捨てておいて下さい。」とでも言うのかと思ったのに。

二代、三代と続いた棟梁の家の、当たり前のしきたりとして伝えられたものかも知れないが、古くて、ガンコで、美しいしきたりのように思えて、何となく嬉しくなってしまうのである。

☆レストランで

美術関係の団体の、或る打ち合わせをファミリーレストランでやった。食事を、という段になって、若いFさんKさんと、私と同年代のWさんは量の多い肉料理を注文した。私だけは和風であっさりとマグロ丼である。食べる時は皆熱心で、どんどんと旺盛な食欲を見せている。ここで私は、ごはんを少し残す事にした。Fさんが言う。「あれ！残すんですか。」私はこれに答える。「これくらい食べれば食べられるんだけどね。私は理性的な人間だから食べたいという欲求を理性が抑えるんだよ。理性がごはんを残させるんだよ。」Kさんが言う。「そんな言葉は信じられないよ、そんな年令じゃないんだから食べちゃいなさいよ。」しかしやっぱり、私は少し残すことにした。

「川柳ができたんですよ。」と私が言った。「じいちゃんの一口残す悪いくせ。」みんな笑った。そしたら、Wさんがすかさず言った。「じいちゃんの一口残す健康法。」Wさんには一本取られた。私の負けである。

☆細い道

私の家の東側を南北に通る道が拡張される事になり、工事が始まった。当然まわり道をしなければならないので、今のところ大変不便である。

この工事のおかげで、普段は余り車の通らない田んぼの中の道が、車の数が増して今までのようにスイスイというわけにはいかなくなった。

この道の往き来で気付いたのだが、車が何とかすれ違う事のできるだけの細い道で、案外うまくっているのである。

かなりのスピードで走って来る車が、すれ違いになると、きちんと道の端に車を寄せて待っているのである。しかも、運転をしている人が、誠に勇ましいお兄ちゃんだったりすると、おや？と思ってしまう。タバコをくわえた若いお嬢さんなども、どんどん飛ばして来たかと思うと、ちゃんと道を譲ってくれるのである。こうなると、私もいつの間にかこの道のささやかな自然発生的なルールに従って、少し早めに道をあけて、通ってもらうようになっていた。強引に突っ込んで来てハラハラさせられた事はない。

〝近頃の若いもんは〟なかなか立派なんだな、と思うのである。

プ・リ・ズ・ム

河のほとりで　倉澤家

今年度四月より二歳児の成黎が仲間に加わりました。女ばかり、中学生と高校生…というグループ構成が続いていた倉澤家にとっては久々の幼児そして男の子です。

なんとも味のある顔と言動でたちまち倉澤家のアイドルになりました。そんなアイドルの出現に我が身の危険を感じたのは娘でした。これまでは一番年下で、お姉ちゃん達皆にかわいがってもらい、わがまま放題だった娘ですが、自分より三歳も年下の成黎が入所し、皆の関心が成黎に集中し、パニック状態に！特に疲れて眠たくなる午後八時を過ぎると、今まで見せたことのないような激しいぐずり方で私やお姉ちゃんたちを困らせました。

しかし、それも一ヶ月が過ぎるとおさまり、成黎の「お姉ちゃん」としての自覚が生まれ、言動に変化が見られるようになりました。

私が成黎を叱ると、成黎は娘の所へ逃げ、娘も成黎をかばいます。自分でできないと娘の所へ行き、「みきィ～やってェ～。」と娘に甘えています。頼りにされればされるほど、かわいくなるようで「しょうがないな、成黎はァ～。」と言いながら着がえや片付けを手伝っています。

夕方になると、娘のひざの上にれながちょこんと座り、二人で大人しくテレビを観ている姿が多くなりました。このツーショットをカメラにおさめ、大きく引き伸ばし、十年後二人にプレゼントしようかと思っています。

どんな反応が返ってくるか…楽しみです。

倉澤　智子

あかり窓　心理室から

梅雨のはしりのようなお天気が続き、夏が近づいてきていることを感じさせます。今年度から入所となった子どもたちもやってきて早二ヶ月が経ちます。その新入所の一人、現在最年少の美歩ちゃんが昼食の後にぐずって私に抱っこを求めてきました。おねむかなぁと、試しに「どんぐりころころ」の歌を口ずさみながら揺すってみました。彼女は独特のハスキーボイスで「もう1回」「もう1回」と繰り返し歌うことを要求し、気がついたらかわいらしい寝息をたてていました。それ以降、美歩ちゃんが眠くなって私に抱っこされると「もう1回」が合言葉になっています。眠くない時もこの歌を歌うと寝たふりをします。そして時々は一緒に歌います。どんぐりの歌がCDやテレビから流れてくるものではなく、美歩ちゃんと私の間にある関係の中で生きていることを感じます。二歳の美歩ちゃんにとって言葉は扱いきれないけど、歌が大事な交流手段になるようです。歌を歌ったり聞いたりすることでの心地よさを、体いっぱいに感じながら今の時期を過ごしてほしいなぁと思います。

積　みどり

子どもたちの季節　仙道家

二月下旬に新しい仲間がやってきました。三歳の弥沙ちゃんです。

人見知り、場所見知りが激しいというので乳児院の先生が入所の日の前に二回にわたって、光の子どもの家に弥沙ちゃんと一緒に来てくれました。まだまだ小さいのに眉間を寄せ堅い険しい表情で不安を訴えていました。

その後で私が乳児院に会いに行った時に、「弥沙ちゃん、池田さんだよ。知っているよね。」と乳児院の先生が弥沙ちゃんに教えてくれました。

弥沙ちゃんは険しい表情で私を見つめ、首を横に振りながら、一歩二歩三歩と後ずさりしました。「いや、いや、私はこんな人知らない」という感じでした。

いよいよ入所の日、弥沙ちゃんは、自分の体よりも大きい大きい不安につぶされそうになりながら乳児院の先生とやってきました。大きいお兄さん、お姉さんがたくさんいて、みんな「弥沙ちゃん、かわいいね。」とまわりに集まってきます。

乳児院で担当だった北条さんのことを思い出し「ほうじょうさん。」と泣き出したり、就寝時、不安になり泣きながら寝入ることも続きました。抱っこ、抱っこの毎日でした。また、「弥沙ちゃん。」と呼ばれると険しい顔で振り向いていました。

ひかりのこ ……… No.104

でも、弥沙ちゃんが毎晩どんなに泣いても同じ部屋の由花、和哉、真里は一言も文句は言いませんでした。そのうち一緒に布団で眠れるようになり、みんなが「弥沙ちゃん、かわいい。」と会う度声をかけてくれ、弥沙ちゃんもにこにこ笑顔が増え、おしゃべりも増え、お外をたくさん走りジャンプするようになりました。

みんなにかわいがられることでとてもかわいくなってきました。これからも弥沙ちゃんの笑顔が増える生活を創りましょう。

池田　祐子

原田家日記

新しい年度が始まり変わることの多いこの時期、原田家もまた、メンバーが大きく入れ替わりました。新しい顔ぶれでの生活。三日もすれば、ぎこちなさはなくなります。その大きな要因はやはり、にぎやかで楽しい夕食の時間をなんとか持つことが出来ているからでしょうか。

中高生が部活などで夕食時間に遅れて暗い夜道を帰って来た時、辿り着いた我が家の窓から明るい光と楽しそうな笑い声が聞こえると、その日にあった嫌なことも忘れ、早く帰って自分もその輪の中に入りたい、そう思えるような食卓にしたいです。

原田家の食卓は、いつも大きな笑い声があふれる楽しい時間です。しかしそんな楽しい時間は、一人一人が少しずつ心を使うことによって成り立っているのです。我々大人と同じように、子どもが疲れた心や悩みを抱えて帰って来た時、そのことに気付いてあげることが出来ずに時にはその場の雰囲気を良いものでなくしてしまうときがあります。毎日楽しい食事時間を持てるように、心使いや話題作りを考え、子どもたちのお腹と心を共に満たす時間にしていきたいです。

小西　剛史

山口家

心身ともに疲れを感じる時期ですがいかがお過ごしですか？山口家には二歳と三歳の姉妹を受け入れ、四月に社会人になった悠子が加わりました。さらに、地域に家を借り、新たな生活をスタートさせ、早二ヶ月が経とうとしています。子ども達は私たちに言葉や行動で様々な心の葛藤を表現してきます。その心のありようを私は全身で受け止められるだけの力量が備わっておらず、申し訳なく思う毎日です。

家庭が壊れ、家族に傷つけられた子ども達がここで生活をしています。「自分はだめな子なのだ」とセルフイメージが低い子ども達です。親から受けた傷ならば、親代わりである私たち大人との関係を通していつの日か自分の命を愛しく思え、「生まれてきてよかった」と心から思えるような情緒を育てられたらと思います。「言うは易し、行うは難し」ですが、いつまでも子ども達に寄り添い続けていこうと思う今日この頃です。

山口　麻衣子

光の中で　佐藤家

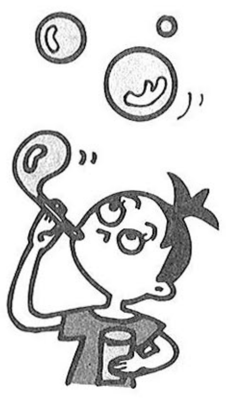
私のグループは原田家から佐藤家に引越しをしました。

いつも甘えん坊で我儘ばかりだった悠花は幼稚園生の妹ができたことでお姉さんになる場面が多くなりました。この四月、晴れて小学校に入学しました。小さな体で大きなランドセルを背負い、四〇分も掛かる道のりを一生懸命歩いて学校に行っています。家に帰ってくる頃には髪の毛もTシャツも汗でビッショリ濡れていて、「おかえり。今日も良く頑張ったね。」と迎えると私の腕の中で力が抜けていき、全身を委ねてきます。それまで緊張の糸が張り詰めていたのでしょう。暫くは悠花の大好物な明太子おにぎりを用意して帰りを待とうと思います。

先日、中二の華美に「いつも他の子のことばっかり考えて華美のことなんて全然考えてくれないんじゃん！」と泣きながら訴えられました。学校で友達から馬鹿にされて悲しかったからどうしても夕食の時、隣の席に座りたかったのにわかってくれないんだから…と吐き出すように言っていました。たくさん我慢させている上に心を痛めていることにも気が付けず、ただただ謝ることしかできませんでした。

入学を迎えた子どもも勿論ですがひとつずつ学年が上がった子ども達も大きく揺れているこの時期は特に、それぞれの子ども達の心に私の心も向け、寄り添うことが出来るように。目に眩しい新緑に負けないように子ども達の笑顔も輝き続けてほしいと願うばかりです。

服部　沙絵子



養護メモ 98

子どもたちの今・これから その二
児童虐待防止法・児童福祉法改正

菅原 哲男

何よりも児童相談所が子どもたちの相談を受け入れる窓口であり、必要なアセスメントを行い、所内の会議を経て子どもにとって適切な処遇の可能な場所へ『措置』をする責務を負っているのである。

相談受付から子どもの居場所の選定という、その子どもにとっては生涯を決定されると言っても過言ではないほど重大な決定権が付与されているのである。それを児童相談所のもつ『措置権』といっている。

児童相談所のはたらきの中でとても重要なものがアセスメント（asse-ssment）という、物事の是非などを決めるために行う、調査（に基づいた評価）のことをいい、これが適切に行われないと、それに基づいてなされる協議や決定も適切を欠くことになるのである。

現在、激増する虐待相談件数に児童相談所の児童福祉司のはたらきは追いついていないのである。虐待事件の報道などによって、少しは児童相談所の職員増があったとは言え、ひとりの地域担当福祉司に一〇〇件を超える相談件数を持っているのが埼玉県の児童相談所の現況なのである。

ある児童福祉司は児童養護施設施設長研修会の発題の折り、「私たちのはたらきは児童虐待防止法の施行以来激変した。相談業務と言うよりは警察業務に限りなく近くなっている」とその深刻さを表明したのだった。

当然そんな状況の中で適切なアセスメントが行われることは稀であろう。

ある年の終わり頃、独りで入所してきた草松徹は、父子家庭で育っていたが、異母兄弟と母は別居して、父親は徹の母よりもはるかに年下の女性と同居していた。

父親は若い継母に気を遣うあまり徹をことさらにないがしろにしたり冷たくあしらっていた。継母にしてみれば、今一緒にいる男が他の女に産ませた子どもなので、これもまた可愛がるよりは憎悪の対象であることが多く、邪魔な存在であったことは前後の状況から推察されるのである。広くはないアパートで徹の目の前でじゃれ合う父と若い女のやりとりは思春期真っ盛りの徹には正視できなかっただろう。徹の分は食事も作られていない日が少なくはなく、人の暮らしのイメージから偏っていくアパートの暮らしに徹の居場所がなくなり、当然のように外で遊び回るようになっていった。外泊しては父親に怒鳴られ、怠学しては教師に叱られ、とうとう虞犯で警察に保護されていた中学生活半ばのある日、父はその女の人と行方をくらましたのである。

それまでの非社会的な言動の連続だった自らの生活や、仲間とのつきあいを絶って普通の暮らしにあこがれた徹は、何とか高校に入りたいという相当の決意もあって、入所となったのである。入所に至る状況から身体的虐待も見られ、放任や怠惰などのネグレクトや心理的な虐待もうかがうことができた。

徹の入所の時、児童相談所で当然行うべき住民票の移動は、そのことによって父や共に虞犯を繰り返した仲間に居場所を突き止められることをおそれて地域外通学を認められての入所だった。しかし、身の回りのものも何一つ持たずにやってきたのである。その日のうちに光の子どもの家の指導員が運転する車で県北西のアパートにとって返したが、そのアパートはもぬけの殻であり、何一つ徹のものはなかった。いつの間にか父親が家主に賃貸契約を打ち切ってしまっていたものと思われた。

これまでの間に、当該の児童福祉司は家庭訪問などのアセスメントにとって重要なはたらきが出来ないで居たことになる。だから、その後もこのことがマイナスに働くことになるのである。

徹は、光の子どもの家に来て生活のリズムを整え、担当の保育士を中心にした生活の中ですっかり変身したかのような生活を続け、遅れていた学習に取り組んだ。翌年春、志望する高校に合格したその日、徹は号泣してその喜びを表現したのである。

一方、家出の父は、若い女に追い出されて、住んでいた町に舞い戻ってきた。徹の異母兄弟の家では数日でひどく殴られて追い出され、行くあてもなくさまよい、厳寒の夜中、光の子どもの家に電話で助けを求めてきた。凍死しそうな寒い夜であったので職員をその町に走らせて保護し、自力で併設した未認可の子ども家庭支援センターの一室に宿泊させた。三3日ほどして徹の顔を見たいという父の強い願いで、寝入っている徹の顔を見た父親はさすがに泣き濡れたのだった。（以下次号）

現場から

続・光の子らしく ⑧
福島先生を偲んで

岩崎 まり子

水田をわたる湿気を帯びた風は、初夏の匂いと盛大な蛙の鳴き声を運んできました。

皆様、いかがお過ごしですか。

本当に緑のきれいな季節を迎えました。最初の頃、たくさんの方々の手をお借りして植えて頂いた小さな苗木たちが、お陰さまで屋根を越える程大きく成長し、どこから見ても一枚の絵のような見事な風景です。遠くから見れば、ぽっかりと浮かぶ緑の島のようです。その中心にいるのは、シンボルツリーのけやきです。このけやきは少し上の方に不自然なこぶがあるのですが、そのこぶは、亡くなられた福島先生と少なからず関係があるのです。

今でこそ七～八メートル程の高さになり、子どもたちが五～六人乗ってもびくともしない貫禄を見せているけやきも、その当時は、まだ大人が少し顔を上げれば届くくらいの背丈しかなく、幹も細く、支えが必要でした。

あの日、いつものように理事会を終えて一泊された朝、福島先生が、これまたいつものようにきちんとした身なりで、けやきの支えをぐらぐらと揺すっていらっしゃいました。

「これは、もうきついんだよ。可哀相に。」とおっしゃいながら。傍で見ると、確かに少しきつそうでした。囲みから幹がはみ出ているのに私たちは誰一人気付きませんでした。

もう十年以上も前のほんの一場面なのに、私の心の中にはその時に福島先生像がインプットされ、それは全く変わりませんでした。私たちに見えないことが見え、私たちが気付かないことを気付かれる。私にとって福島先生は、そんな方でした。

ですから、お会いする前はいつも緊張していましたが、実際お会いすると、その温かな笑顔や物腰、楽しいお話などに魅了され、またお会いするのが楽しみになり、それでもやはり、その時は緊張してしまうのでした。

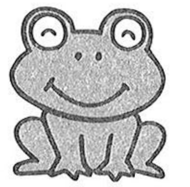
一九年前の秋雨の日、面接試験のため荻窪教会で初めてお会いしてから、そうたくさんお話させて頂いたわけではないのですが、私たちが必要としているときには遠くからいつも助け、支えて下さったという実感があります。そして、それは、これからも変わらず残っていくものだと思います。実際にそこに居ても居なくても、「居る」と感じることができる。それが存在であり、関係であるのでしょう。

心を、目を、耳をどこに向けて歩むべきなのか。先生は、それを身をもって示して下さっていたと改めて思っています。

病床にあって尚、光の子どもの家のことを心配して下さっていた先生に安心して見守って頂けるくらいの生活をこれからは創っていきたいと思っています。

物言わぬけやきの悲鳴を聞き分けられた先生のその姿勢を私もいつか身に付けられるよう意識していきたいと思います。

心からの感謝をこめて…。



週刊朝日書評で
絶賛！

今年11月、児童虐待防止法改正法施行

激増する子どもへの虐待！虐待を被けた子どもが親になって虐待する。この国で常識化してしまった言説は垂れ流され、蔓延する。しかもそうした状況に学者・研究者の誰も責任を負わない。
そんな子どもたちと暮らしを重ね、共苦した18年に及ぶ現場での思考と試行。
ついに到達した虐待の負の世代間連鎖を突き破る地点までの足取りを記した注目の書。

『誰がこの子を受け止めるのか』　言叢社刊 1,600円

菅原哲男著

全国有名書店で好評発売中！

注文は、言叢社TEL03-3262-4827か光の子どもの家あるいは書店まで。

日誌抄　＝子どもと創る暮らしの風景＝　2月1日▶6月末日

2月
幼児１０名 小学生９名 中学生６名 高校生８名 計３３名
３日　県立高校推薦入学試験３名受験
６日　大坂沙慧きもの学院に合格
○　埼玉県所沢児童相談所より３名来訪、情報交換
１２日　北海道美深育成園来訪見学と交歓
１５日　聖学院大学ボランティア１５名来訪　感謝
１７日　児童相談所地域担当福祉司来訪して大坂沙慧の措置延長についての調査、父も同席
２０日　舞鶴学園より６名来訪して見学と交歓
２４日　小１女子のショートスティ２４日まで
２５日　『誰がこの子を受け止めるのか』菅原哲男著言叢社より刊行
２７日　和木弥沙２歳入所 仙道家池田指導員担当
２７日　児童相談所所長来訪１８歳で社会的自立は大変困難である、本児に措置延長が必要であることは個人的には同感する。怠惰などのよろしからざる子どもたちの措置延長も認めざるを得なくなること、里親制度への影響も考慮する。措置の必要な子ども激増。延長は不可１９９７年厚生省通知により施設内で対応が可能である」と通知
２８日　浦和児童相談所地域担当福祉司来訪して情報交換
今月の物品ご寄贈者 松本明子 岡本の各位様

3月
５日　中央児童相談所地域担当福祉司来訪して情報交換
６日　所沢児童相談所地域担当福祉司来訪して情報交換
２月１日～１月末日
８日　県立高校卒業式３名卒業
９日　第８回出発の会大利根町町長教育長学習指導ボランティアや教師 元職員や教会関係者など約７０名余が集い励まし 別れを惜しむ涙と感動の一夕。
１０日　江森ヘアーサロンの引き続いての調髪ご奉仕感謝
○　第３回原道小学校との懇談会
１３日　高下一志新聞奨学生として都内の販売店に職員や子どもたちに見送られて赴任穴水指導員同道
１４日　大利根中学校卒業式３名卒業
１８日　３名の高校合格祝い ３年間の健闘を確認して
１９日　大利根藤幼稚園卒園式４名卒業みんなに祝福され
○　デンマーク牧場子どもの家より来訪見学
２０日　田村さん調髪ご奉仕　感謝
○　大坂沙慧措置延長不許可　措置解除通知
２２日　第６８回事業計画予算案など審議承認
○　大坂沙慧の措置延長理由開示要請書送付
２４日　児童相談所より所長が話した通りと回答
２８日　立川成黎２歳入所倉澤家倉澤保育士担当
３０日　児童相談所より省通知によるという最終通知
３１日　歓送迎会実施　このように年度を終ました（くら）

反射光

☆梅雨の前に台風が上陸し、地震が襲って人間の傲慢な正義意識をたしなめているようです☆それでも晴れた日にはさわやかな五月の風を楽しめます☆設立後七年目の感謝礼拝説教の録音を探し出して掲載し、福島勲前理事長追悼特集を組み、在りし日を偲びました☆児童虐待防止法の改正作業も進捗の様子です☆力の強い者が正しい訳でなく、弱者一人のために全員が力を合わせて支える福祉の実現こそが平和を産み出していくのだろうと信じます☆そんな価値観が法改正の柱になることを願います☆虐げられてきた子どもたちの弱さにこそ見習わなければならないと心します☆私ごとですが、発達障害で市の作業所に通っている娘の送迎が中止されました☆自力で通所できない者の数が少なくて不公平だという大勢の親たちの意見がそうしたもののようです☆創立の頃からを知る者として福祉の心の薄れを感じました☆豊かになり条件が整備されても福祉の心を見失わずに励みます☆ご支援を！（哲）